

献 画

P.B. シェリ 『アトラスの魔女』 から

神保 菘

私は2001年からシェリ (Percy Bysshe Shelley 1792-1822) の詩想を日本語に訳すと共に木版画で表現する試みを行ってきた。丁度その頃高等学校時代の美術の仲間に誘われて「芦」展と称して毎年神戸で展覧会を開いて今秋第10回を数えた。いい仲間に恵まれ皆様から御好評をいただいている。その仲間の方々及び、変わらず毎年見に来て下さるの方々にはただ感謝申し上げている。

最近3年間は『アトラスの魔女』(1820) を題材にして今年で全篇 672 行の日本語訳と 15 枚の木版画が出来上ったので注などを整えテキストの最終点検などを行った上で別の詩と共に対訳の木版画挿絵付として遠からず出版する予定である。

本稿ではその 15 枚の中から 2 枚を選びそれらの写真に、それぞれに対応する原詩、その日本語訳及び解説をつけ、私が日本語訳と木版画でめざすところを述べたい。

木版画 1.

A Green and Glowing Light (緑に光る、あの光)(2010 No.1)



原詩 1

A Green and Glowing Light

(P.B.Shelley, *Witch of Atlas* XXXIX. 353-360)

The silver noon into that winding dell,
 With slanted gleam athwart the forest tops,
 Tempered like golden evening, feebly fell; 355
 A green and glowing light, like that which drops
 From folded lilies in which glow-worms dwell,
 When Earth over her face Night's mantle wraps;
 Between the severed mountains lay on high,
 Over the stream, a narrow rift of sky. 360

日本語訳 1

緑に光る、あの光

(シェリ『アトラスの魔女』XXXIX. 353-360)

銀色の真昼が曲りくねった谷間に、
 弱々しくやって来た。森の上から斜めに射して、
 夕方の黄金のように和らげられて。 355
 「大地」が「夜」のマントをかぶるとき、
 蛍を宿す百合のつぼんだ花から落ちる
 光にも似た緑に光る、あの光。
 切り裂かれた山々の間の空高く、
 流れの上空に狭い空の裂目がのぞく。 360

解説 1

魔女（これは魔法を使える女という意で実は心身ともに美の化身、悪いことをするいわゆる「魔女」の意味は全くない）が新しい生命、両性の子を乗せて小舟でアフリカ大陸を駆けめぐる。まず山々の間をめぐる川下り。山々は峻しく、うっそうたる森は昼尚暗い。従ってそこに射す光は真昼でも斜めに射す感じになり夕方のように暗くほのかで、例えてみればすっかり日が暮れてから、百合の花のつぼんだ中にある蛍が放つ光のように緑がかかった光だ、という。又そそり立つ山又山の間のすき間からほんのわずかの空が舟が川を下降するその頭上に見える、という。

黒豹などの野獣が棲む森や、果樹が生い繁る原生林の暗い中を舟が疾走する様は前連(XXXVIII)から続くが上掲の部分だけでも十分原生林の暗さと山々の峻しきは表現され、そのほのか暗く弱い光を、夜、白百合の花の中で発する蛍の光があたりを照らすさまに例えるとは何と美しく繊細な感覚だろう。引用最後の二行も山の峻しさ、深さを十分に表している。

木版画 2.

The Pinnacle Fled (舟は飛ぶ)(2010 No.2)



原詩 2

The Pinnacle Fled

(P.B.Shelley, *Witch of Atlas* XLII. 377-384)

And down the earthquaking cataracts [which shiver
 Their snow-like waters into golden air,
 Or under chasms unfathomable ever
 Sepulchre them, till in their rage they tear 380
 A subterranean portal for the river,]
 It fled — the circling sunbows did upbear
 Its fall down the hoar precipice of spray,
 Lighting it far upon its lampless way.

日本語訳 2

舟は飛ぶ

(シェリ『アトラスの魔女』XLII. 377-384)

地を揺する瀑布を下って疾駆した。
 [その瀑布^{ましろ}雪^に白^じいしぶき黄金霧に変え、
 次は底なき割れ目の下に
 己れ葬り、遂に自身の猛威によって 380
 地下から出口、突き破って川となる。]
 舟は飛ぶ——虹のアーチに支えられ
 白い飛沫の絶壁に乗り急降下、
 灯火^{あかり}なき道はるか先まで照らされて。

解説 2

上掲部のシェリの詩の魅力で最も印象的なのはやはりアフリカ大陸北部アトラス山を自由奔放に流れゆく川及びその一部の瀑布とそこを自由自在に疾走できる魔女と小舟の心地よさであろう。魔女の魔力は場合によって様々な形で発揮されるがここでは切り立った崖から垂直に落ちる滝を舟で下る方法として白いしぶきを上げて落下する上方、そのしぶきが細かい水蒸気となって立ち昇るあたりに弧を描いて美しい虹が出来る（これは私達が日常上方に向けて散水などする時によく経験することである）、この虹の弧に乗るとうまく支えられて、瀑布のしぶきの白い絶壁 (the hoar precipice) を無事降下出来るばかりか、小暗い山中にあってこの虹のおかげで前方も明るく照らされて進むことが出来る、という。しかもこの ‘Lighting it far upon its lampless way’ (l.384) は大変象徴的な意味をもつ。ローマ帝国によって破壊されたアフリカの大自然をとりもどすために魔女が新しい生命を乗せた舟で浄化しようとしているその前途を照らしてくれているとともとれる。

上記二例で御覧いただいたように、私の木版画は常にシェリの原詩及び日本語訳と一体となって

おり日本語訳と木版画はそれぞれ原詩から浮ぶイメージを表現したものである。即ち原詩（その部分だけでなく前後あるいは全篇）を何度も音読することによって無数の連続した音や映像等の雰囲気浮かぶのでその一部を切り取り、そこに含まれる音（リズム）、思想、光景のすべてを線で表現する。シェリは博学多読であったから彼の作品の背景は複雑である。『アトラスの魔女』の場合アトラス山（特に LIV 連まで）はギリシアの歴史家ヘロドトス（『歴史』IV. 184）やローマの博物学者で著述家プリニウス（『博物史』V. 5-11）に山の高さ（頂上は常に雲の中に包まれている等）や嶮しさ暗さ等が記されている。LVII 連以後最後までに関わるナイル川流域やエジプト迷宮（LVIII 連）のことはヘロドトス（II, III 巻）やプリニウス（XXXVI. 85-90）に詳しい。これらギリシア、ローマ作家の記述はおそらくシェリがこの詩を書く時念頭にあったと思われる。従って私がシェリの詩を読む時もこれらの記述をも念頭に置かなければいけない。

シェリの詩は何度も音読すればするほど流れる美しさを感じずるがその背後にはギリシア語やラテン語のリズムが無意識の中に入り込んでいるのではないかと思う。それは（土井）晩翠の詩や漱石、清少納言の文体に漢詩や漢文のリズムが感じられるのと似ている。これはどこがどうと分析することはなかなか困難であろうがギリシア語やラテン語を多く読む（音読する）ことによって感覚的に感じられるものではないかと思う。そうして体感した感覚を日本語で表現し、木版画の線で表現出来ればと思っている。原詩を読んで視覚的な情景が浮んでくるのは勿論であるが、言葉の端々から様々な背後の思想と同時に、音の響きからも様々な要素が感じられそれらすべての感触を無駄のない日本語と効果的な刻線で表現したいと思っている。

2010年11月24日

追記

石井芙蓉雄様

石井さんと言えは何ととっても、教授会その他の会議で雄弁に相手を論駁なさるお姿が印象に残っております。とかく不利な立場に追い込まれる他学部との議論でも頼もしい限りでした。色々な役職も厭わず引き受けてくださるので私など随分恩恵に与り、ありがとうございました。

もう一つは十九世紀研究会で長い間お付き合いいただきましたね。ご専門はドイツ文学ですが色々な言語も勉強したいとおっしゃってそのうちギリシア語も一緒に読みましょうとおっしゃっていました。それは叶わなくなってしまいましたが、今は諸所自在、このアトラスの魔女のように世界中を、いや宇宙の隅々まで駆け回って下さい。

御冥福を祈りつつ。

平成 22 年 11 月

神保菘

(本学名誉教授)